

大学生の力を活用した集落復興支援調査

事業代表者 工学研究科・教授・三橋 伸夫

構 成 員 福島県企画調整部地域振興課・主事・戸倉 毅

1. 事業の目的・意義

平成 25 年度、26 年度の 2 年間にわたり、福島県の「大学生の力を活用した集落復興支援事業」を通じて、農村集落活性化に建築計画研究室の学部 4 年生、大学院生とともに取り組んだ。平成 26 年度の本事業の目的は、福島県内の農村集落の活性化を当該地域の抱える課題に即して図ることである。対象となった二本松市水舟集落は、東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故に伴い、放射能汚染の恐れから農業生産に支障が生じていた。従来からあった少子高齢化に加えて農業生産の停滞をどう克服するか、活性化を検討し行動を起こすことが目的である。また、この事業は、参加する学生の地域対応力、コミュニケーション力の向上につながることを期待される。

2. 研究方法（事業内容）

(1) 対象集落の現状把握と課題抽出

平成 25 年度（前年度）は、対象集落の現状把握を行い、集落が抱えている課題を明らかにした。このため、集落全 34 世帯への配票調査（家族構成・職業、農業生産、住宅等）、住民の参加にもとづく懇談会・ワークショップの開催、集落内環境の点検活動、を行った。

(2) 農家民泊ガイドラインの作成

前年度の調査により、農業生産活動が停滞する一方、各世帯ともかつての大家族向きの大きな住宅を有していることが明らかになった。他方、座談会では農家への一般客の宿泊には抵抗感が強かった。これを受け今年度は農家民泊体験を実験的に行うべく、福島県内外の農家民泊実施先進事例を調査し、農家民泊ガイドラインを作成して、集落住民へ働きかける手段とした。

(3) 農家民泊の実施（実証試験）

農家民泊ガイドラインにもとづいて、実証試験として学生による農家民泊を実施し、取り組みの前後で実施世帯の世帯主・配偶者の意見・感想を聞き取り意識変化を分析する。また、集落内への波及を意図して、ワークショップの場において農家民泊の実施に関する発表と討議を行う。

(4) 集落資源の発掘・整理と資源カレンダー作成

農家民泊は、いずれ一般の都市住民を宿泊客として想定するため、農家に宿泊するだけでなく農家・農村の生活を体験するためのプログラムを開発する必要がある。このため、集落の自然、環境、景観や暮らし、農業、行事などについて、これらを住民自身に認識してもらうとともに、資源として整理し、年間曆にまとめることとした。

以上の取り組み方針のもとづき、今年度は以下の表 1 に示す活動を行った。

表 1. 平成 26 年度活動内容

月日	活動内容
5 月～8 月	・農家民泊ガイドラインの作成
8 月 23～24 日	・農家民泊、感想報告会 ・農村活性化についての講演会 ・グラウンドゴルフ大会 ・バーベキュー（交流） ・集落のフィールド調査
12 月 6～7 日	・農家民泊、農家生活体験 ・ワークショップ ・芋煮会（交流）
12 月 20 日	・地域づくりオープンカフェで発表（福島県庁内）

3. 事業の進捗状況

(1) 対象集落の現状把握と課題抽出

平成 25 年度については本年度の報告対象ではないが、経緯を述べる必要があることから表 2 に整理した。活動を通して明らかになった集落の課題として、① 集落全体の集まりは基本的に行われておらず、集落への帰属意識の低下や住民間の関係の希薄化が進

む一方、20歳代の若い世代の割合が多いながらも集落への関心が低いこと。② 少子高齢化や高齢者のみ世帯の高い割合、風評被害などから起こる農業生産の停滞、拠点施設（集会所、体育館＝小学校廃校施設）の老朽化が挙げられる。③ 集落内に落ち着いた農村風景、見晴らしのいいスポットが存在し、季節ごとの自然の表情に出会える環境をもつとともに、野菜等の食材が集落の魅力として挙げられた。これらをもとに本年度の事業内容を企画した。

表2. 平成25年度活動内容

日付	内容
8月23～24日	・集落代表と調査打ち合わせ ・住民へのヒアリング調査 ・集落のフィールド調査
10月	15日 住民へのアンケート配布 22日 アンケート回収 (回答数:103/104人 33/34世帯)
11月2～3日	・住民へのアンケート結果報告 (ワークショップ、住民交流会) ・集落のフィールド調査
1月31日～ 2月1日	・住民への年間活動報告 ・地域づくりオープンカフェでの発表

(2) 農家民泊ガイドラインの作成

ガイドライン作成の目的は農家への宿泊を将来的に観光（グリーンツーリズム）の取り組みの一環とすべく心理的な抵抗感を和らげるための案内とすることである。他県での同種のリーフレット等を収集し、宿泊業開業の法律要件や規制事項の解説は極力省き、宿泊客をもてなす上での具体的な準備や心構え、予想されるトラブルとその対処等を中心とし、実施する世帯が取り組みやすいよう、農家民泊をイメージしやすいようにとりまとめた（図1参照）。これを対象集落の自治会役員を通じて全世帯に配布した。

(3) 農家民泊の実施（実証試験）と関連取組

1) 第1回（8月）

第1回は、8月23～24日に1泊2日で農家民泊の体験を行った。3軒の農家世帯で民泊を実施し、合計6人の研究室学生と教員1人が宿泊した。農家が提供する食事は、各農家が自分の畑で育てた

野菜を中心に調理した家庭料理である（写真1）。また、学生たちはお世話になった農家の野菜収穫作業、薪割り作業（翌日のバーベキューの準備）を手伝うなどして農家の暮らしの一端にふれた。

各農家世帯での体験は、これを個別の体験に止



図1. 農家民泊ガイドライン



写真1. 農家民泊の夕食の様子

めず集落全体に広げ、より多くの世帯に波及させる必要がある。このため、翌日の集落住民と学生たちとの懇親会（バーベキュー大会）で、農家民泊を実施した世帯から取り組んだ感想を報告してもらい、質疑応答などを行ってできるだけ多くの



写真2. 農家民泊感想報告会

世帯での情報共有に努めた(写真2)。この報告会では、さらに、農家民泊への意見・感想、今後の活性化に向けての話し合いを行った(ワークショップ)。実際に農家民泊を行うことによって、後述するように、農家民泊に対する意識に変化が見られ、実施しない世帯の関心も高まった。

第1回宿泊実験の前夜には農村活性化についての講演会(写真3)、翌日には交流イベントとしてグラウンドゴルフ大会を実施した(写真4)。

2) 第2回(12月)

第2回は、12月6～7日に実施世帯数5、宿泊者11名(研究室学生と学内友人で外国人留学生を含む)で実施した。今回は、前日に各受入れ世帯での農村生活体験(野菜収穫、薪割り等)を行い(写真5)、翌日には体育館において集落の自然、



写真3. 農村活性化についての講演会



写真4. グラウンドゴルフ大会



写真5. 野菜収穫体験

表3. 農家民泊実施世帯の事前・事後意識

時期	参加数	事前意識			事後意識		
		項目	男性	女性	項目	男性	女性
8月	実施世帯数3 宿泊人数7	不安だった事	・他人が来ること ・話ができるか不安	・他人が来ること ・料理	良かった事	・話ができただ事 ・いつも通りで大丈夫だった	・料理を喜んでもらった事
		家族の意見・動機	・ガイドラインや集落長の話を受け、やろうと思った	・心配はあったが世帯主に説得された	大変だった事		・特になし
		役割分担	・農作業等の外仕事	・家事	今後について	・宿泊人数についての不安 ・もっと交流時間がほしい	・年齢差が開くことが不安
12月	実施世帯数5 宿泊人数11	不安だった事	<再参加世帯> ・特になし <初参加世帯> ・外国人が来る事 ・仕事と時間	<再参加世帯> ・特になし <初参加世帯> ・料理や衛生管理	良かった事	<再参加世帯> ・外のひととの交流 <初参加世帯> ・実体験できた事 ・会話を楽しめた事	<再参加世帯> ・外のひととの交流 ・料理を喜んでもらった事 <初参加世帯> ・会話を楽しめた事 ・料理を喜んでもらった事
		家族の意見・動機	<再参加世帯> ・前回は良かった ・1回で終わるのが惜しかった <初参加世帯> ・外の目線を取り入れたかった	<再参加世帯> ・手伝う ・まあいいか <初参加世帯> ・世帯主に影響された	大変だった事	・特になし ・地域のイベントと重なり忙しかった	・特になし
		役割分担	・宿泊者との飲談 ・野菜収穫体験	・料理などの家事 ・野菜加工体験	今後について	・宿泊者の人数や情報がわからないと不安 ・冬の寒さが不安 ・民泊を継続したい ・新しい体験交流をやりたい	・早めに宿泊者の情報を入手したい ・料理の心配はある ・民泊を継続したい ・宿泊者の感想が聞きたい
		準備した物	・いつも通り ・灯油	・食材 ・寝具			
		ガイドラインについて	・普段通りでよいことがわかった ・同じ地区の体験者の経験談がほしい ・ホテルとの違いが明記され分かり易い ・参加者側がやりたい事を知りたい	・何回も読み返した ・ちゃんとは読んでないが保存している			

環境、景観や暮らし、農業、行事などについて、これを資源として整理し、年間曆にまとめるワークショップを2班に分かれて開催した（写真6）。

(4) 集落資源の発掘・整理と資源カレンダー作成

集落の資源と魅力を住民同士で検討した結果、チーム①では「食べる」の項目が、チーム②では「体験する」の項目で地域資源の数が多くなった。その内容は共に各家庭で作られる季節の作物（ニンジン、タラノメ、ツルムラサキ、サトイモなど）が多く挙げられた。また、通年では、毘沙門堂や稲荷神社などの集落文化遺産が多く挙げられた。

ついで、各チームごとに地域の資源を活用して、理想の集落に近づける方法や、問題を解決する方法を考えた。チーム①では、住民同士の集まりに参加する人が少ないという現状に対して、住民みんなが参加できるような場をつくるという目標を立て、住民同士の集まる場や集落のシンボルづくりなどに焦点を当てた提案が出された。

チーム②では、若い人が家を離れていて集まれる機会があまりないという現状に対して、住民同士や集落外の人が集まれるような集落にしたいという目標を立て、集落外の人を呼び込むための地域資源の活用方法に焦点を当てた提案が出された。

4. 成果

2回の農家への宿泊（実証試験）を核として、地域住民と学生とが交流を深める中で、集落の人たちの意識も前向きになってきた。このことは、前年度には農家民泊に対して消極的であったものの、宿泊ガイドラインの作成と全世帯配布を契機として、2回の実施を実現できたことに端的に示されている。実施した世帯の意識についても、前後で変化が生じており、より積極的姿勢に推移



写真6. 集落資源カレンダーづくり（ワークショップ）

	冬			春			夏			秋			通年
チーム①	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	
観る	1				1					1	1		5
体験する	1								2		2		
学ぶ			1									2	3
食べる	4			1	1	2	1	1	5	3	1		
遊ぶ											1		3
買う													
その他													1

	冬			春			夏			秋			通年
チーム②	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	
観る	3			1	1						3	1	2
体験する	2		2		1	2	1	3		5	2	7	2
学ぶ													
食べる	2	1	1					1	1		1		1
遊ぶ					2								1
買う													
その他	1												

（注）数字：地域資源の数

図2. 年間地域資源カレンダー（まとめ）

していることが読み取れる（表2）。同時に、学生・留学生との交流を通じて、自らの集落をより客観的に見る視点の獲得がある。外部の人たちに自分たちの普段の生活、農業を開いていく自信が生まれつつある。

5. 今後の展望

二本松市水舟集落と宇都宮大学建築計画研究室との間で培われた信頼関係を今後も継続させ、集落の活性化に寄与したいと考える。集落側に求める課題として、①農家生活体験プログラムの開発（たとえばソバうち、ワラ細工・竹細工など）、②料理講習の実施（世帯間の家庭料理に関する情報交換・共有、新たな郷土料理の開発など）、③耕作放棄地の点検と活用可能性検討、④集落内案内看板の設置検討と製作、が挙げられる。これらの実現を通して、集落の更なる活性化を図りたい。